

歴文29年7月研修会

「古代豪族・物部氏の実像に迫る」

1、実施日：平成29年7月11日（火） 雨天実施

2、集合場所・時間：近鉄大和西大寺駅南口 8：00

3、行程スケジュール

大和西大寺駅（8：00発）⇒磐船神社（8：30～9：00）

⇒石切神社（9：40～10：10）

⇒大聖勝軍寺・物部守屋墓・昼食（11：10～12：30）

⇒由義宮（13：00～13：30）

⇒弓削神社（14：00～14：30）

⇒石上神宮（15：15～16：00）

⇒帰途へ 大和西大寺着駅（17：00）

4、資料

①「古代豪族・物部氏の実像に迫る」

②別紙

1、物部氏系図

2、関連地図

3、東弓削遺跡の新聞記事

③参加者名簿

奈良・人と自然の会
歴史文化クラブ

担当世話人：中井弘・川井秀夫・弓場厚次・古川祐司

（事務局・連絡先 古川祐司）

（Tel 0742-44-8621、090-4298-2344）

歴文7月研修会 参加者名簿

	氏名	参加料		備考
No.1	青木 幸子	3,000円		
No.2	阿部 和生	3,000円		
No.3	池田 信明	3,000円		
No.4	内河 洋文	3,000円		
No.5	小田 進八郎	3,000円		
No.6	川井 秀夫	3,000円		代表・世話人
No.7	川勝 孝雄	3,000円		
No.8	川岸 美子	3,000円		
No.9	塩本 達也	3,000円		
No.10	田代 一行	3,000円		新入会
No.11	田積 彰男	3,000円		新入会
No.12	田中 克彦	3,000円		
No.13	辻本 愛子	3,000円		
No.14	辻本 信一	3,000円		
No.15	富井 忠雄	3,000円		
No.16	永井 幸次	3,000円		
No.17	中井 弘	3,000円		世話人
No.18	中野 達矢	3,000円		新入会
No.19	西谷 範子	3,000円		
No.20	羽尻 嵩	3,000円		
No.21	坂東 久平	3,000円		
No.22	福田 美伸	3,000円		
No.23	古川 祐司	3,000円		事務局・世話人
No.24	松尾 弘	3,000円		
No.25	森 英雄	3,000円		
No.26	山本 妙子	3,000円		
No.27	弓場 厚次	3,000円		世話人

2017年7月度歴文研修会

「古代豪族・物部氏の実像に迫る」 by 中井弘

I、物部氏とは一神話と歴史の狭間

1. 物部氏は古代日本で宮中の祭礼と武器の製造、刑罰、軍事を司っていた有力豪族で、最大の勢力と由緒を併せ持ち、初期の大和政権を支えた大氏族であった。河内国渋川郡（八尾市）辺りを本拠地とした豪族で、朝廷の軍事部門として地方豪族を征服するたびに、物部の領地を各地に置き、その勢力は西日本から東海地方に至る広大な地域に分布し、国造として広範囲に影響力を及ぼしていた。

メモ：国造とは大和朝廷の地方官であるが、国の長を意味し、軍事権・裁判権・祭祀など広い範囲で自治権を認められた。筑紫の国造「磐井」のように朝廷に反抗する者もいた。構

2. 物部氏祖神・饒速日命（ニギハヤヒ）の伝承

「日本書紀」神武天皇即位前紀によれば、「饒速日命」（ニギハヤヒ）は、神武東征に先立ってヤマトに天降った天神の子であった。神武のヤマト入りに最後まで抵抗した先住民の首長・「長髓彦」（ナガスネヒコ）の妹「三炊屋媛」を妻とし、その間に可美真手命（ウマシマデ。先代旧事本紀では宇摩志麻治ウマシマジ）が生まれた。長髓彦はニギハヤヒに仕えていたが、神武と戦いを止めなかったため、ニギハヤヒは長髓彦を殺害して神武に帰順した。このニギハヤヒを「物部氏之遠祖也」と記している。

日本書紀は、神武がヤマトに入るより先に、物部の祖「饒速日」が何処からともなくヤマトに天降り、天皇家よりも古い歴史を有していたことを認めている。

この物部氏祖先伝承が日本書紀「神武紀」に明記されている所を見れば、物部氏の尊貴性が日本書紀編纂において公認されていることが分かる。

4. 天降りと東征

物部氏の歴史書「先代旧事本紀」の「天神本紀」によれば、ニギハヤヒが天磐船に乗って天降りした際、供奉した32人の神々と25部の天つ物部、その他船長や船子、倭鍛冶師が同行している。このリストは記紀には見られないことから、価値のある資料とする意見が多い。

物部氏の居住分布が、北部九州から四国北岸、播磨、近畿地方に至る瀬戸内海岸地帯に多く分布していることが分かる。特に北部九州の遠賀川流域が密集地域である。これらの地域には25部の天の物部氏と同じ名前の地名が多い。これらのことから、ニギハヤヒが天磐船に乗って河内に降臨した説話は「物部東遷説」の根拠となっている。考古学から見て、弥生時代後期に鉄の精錬技術者が北部九州から畿内に移動したとい

う「工人東遷説」にも合致している。「魏志」にいう倭国大乱の結果としての大移動という説もある。

メモ：先にヤマトを統治していた天つ神・ニギハヤヒが、なぜ後から来た神武に天皇位を譲ったのか・・・なぜ？

天照大神の命で天下った皇族同士が、葦原中つ国を治める為に相争うのを避けるために、日本書紀の編纂を命じた天武天皇として、主従の別をはっきりさせたとする説がある。

建国神話には、その根幹に民族が過去に経験した歴史的事実が秘められているといえる。

II、物部氏の盛衰

1. 継体天皇即位に貢献

武烈天皇崩御の後に、大連の物部麁鹿火と大伴金村は、応神五世の孫で越前の豪族であった、男大迹王を擁立し、継体天皇の即位に貢献した。継体朝で再び大和朝廷最高の官職「大連」に任ぜられる。

2. 磐井の乱平定

継体 21 年（527）6 月、筑紫の国造、磐井が新羅と通じて九州北部で挙兵した。物部麁鹿火は征討将軍に任じられ、翌年 11 月、筑紫三井郡にて磐井を破って処刑し、「磐井の乱」を平定した。磐井征討の際、天皇から「長門より東は自分が取るので、筑紫以西は汝が取れ」と統治を委任された。継体の目的は磐井の領土侵略ではなく、朝鮮半島・中国大陸との交易ルートの確保であった。物部氏はこの時勢力を拡大している。

3. 蘇我氏との崇仏・排仏論争と権力闘争

大連尾輿は欽明天皇の時代に、百済の聖明王から仏像と経典が献上されたとき、中臣鎌子とともに廃仏を主張した。蘇我稲目が崇仏を訴えたため、排仏派と崇仏派との間に激しい対立が起こった。

4. 物部氏の滅亡

物部尾輿の子・守屋と蘇我稲目の子・馬子とは、排仏・崇仏の抗争を受け継いだ。抗争は用明天皇崩御の後、天皇后継者争いにまで発展する。聖徳太子の戦勝祈願もあり、守屋は逆賊となり、物部氏の本拠地・河内国渋川の家で、秦河勝によって殺害され、ここに物部氏は滅亡した。守屋は四天王寺の守屋祠に祀られている。

しかし大化の改新で蘇我氏が力を失い、物部の朴井連雄君（エノイノムラジオキミ）が、壬申の乱で大功をたて、物部氏は再び浮上する。

5. 物部氏最後の人物、石上物部麻呂、藤原京で憤死

大宝律令（701）の完成から 9 年後、和銅 3 年（710）の平城京遷都に際し、石上麻呂は藤原京の留守役を任命され、旧都に残された。これは新しい政権によって捨てられたことを意味する。石上麻呂はこの時、左大臣（現在の総理大臣）であった。一国

の宰相でありながら、旧都に取り残されたのは、藤原不比等による物部つぶしの陰謀であったといわれる。石上神社を拠点とした国家祭祀の職掌も、中臣氏に取って代わられた。「日本書紀」が書かれたのは、それから 10 年後のことである。古代最大の豪族・物部氏がすっかり抹殺されてしまった。

以降、二度と物部氏は朝堂のトップに出ることは無く、歴史の表舞台から退場した。

Ⅲ 物部氏関連神社など

1、磐船神社(大阪府交野市私市)

祭神： 天照国照彦天火明櫛玉饒速日命(あまてらすくにてらすひこあめのほあかりくしたま)

ご神体： 命が乗って来られた「天の磐船」といわれる高さ 12m、幅 12mの船形をした巨大な磐座

饒速日命(にぎはやひのみこと)が天照大神の詔により、天孫降臨された地とされる生駒山系の北端、河内と大和の境に位置する「河内国河上哮ヶ峰」にある。生駒山を源流とし、境内を流れる天野川は、行場とされる巨大な磐座の下を流れ、10kmほど下流の淀川に注ぐ。この天野川に沿って古代の道「上つ鳥見路」(現 168 号線磐船街道)が通っていた。

古代における当社の祭祀は、饒速日命の子孫で交野に住む「肩野物部氏」が関係していた。交野市の「森古墳群」(3 世紀末～4 世紀)はこの一族の墳墓と考えられている。その中で最大の前方後円墳が、饒速日命の六世の孫・伊香色雄命(いかがしこお)とする説が有力である。

物部氏の歴史書「先代旧事本紀」にニギハヤヒ降臨の様子が記されている。

「饒速日尊」は天照大神の命を受けて、天の磐船に乗って河内国河上の哮峰に天降り、そして大和国鳥見の白庭山に遷られた。天の磐船に乗って大空を飛び回り、この地をじっくりと見定めて天降ったのである。空から見た日本の国というのは、このことである。」

メモ：日本国(ヤマトの国)というわが国の呼び名は、このことから始まったとされる。

万葉集には、「虚見つ倭の国」「天にみつ倭」などと多数読まれている。

2、石切劔箭神社(東大阪市石切)

祭神： 饒速日命 とその御子・可美真手命(日本書紀。旧事本記では宇摩志麻治命。古事記では宇麻志麻遲命)の 2 柱

石切劔箭神社鎮座の由緒は、社殿と宝庫が約 700 年前の足利時代に兵火にかかりことごとく焼失したため、詳細は不明とされる。だが「延喜式神名帳」(927 年)の中にはすでに「石切劔箭命神社二座」と記載されている。神武天皇紀元 2 年、現生駒山中の宮山にニギハヤヒを奉祭したのをもち、神社の起源とし、崇神天皇の御代になって「下

之社（現本社）」に可美真手命（ウマシマデ）が祀られた。貞観 7 年（865）に本社の社格が正 6 位から従 5 位に昇格されている。

境内の神武社には神倭磐余彦命（神武天皇）が祀られている。

本社の祭祀は代々、古代天皇に仕えた物部氏の有力支族、穂積氏（現・木積宮司は 107 代目）が司ってきた。古事記では饒速日命の子・宇麻志麻治命が穂積氏の始祖とする。

長髓彦の妹で饒速日命の妃・三炊屋媛は石切駅より山手の「上之社」に祀られている。

当神社周辺には、神武が到達した「草香邑」（東大阪市日下）、東征で初めての戦いが行われた孔舎衛坂（東大阪市）があり、聖蹟伝承地の石碑が建っている。

3、弓削神社（八尾市弓削町）

「延喜式」神名帳には弓削神社二社と表記され、久留米市、熊本市の弓削神社も二社一対となっている。

付近に勢力を保持していた物部氏の一族・弓削氏の氏神である。800 年ごろの創建といわれる、道鏡の出身地であるが、弓削神社は彼の没後の創建であり、直接関わりはない。かつて東西の社殿の間に久宝寺川（旧大和川）が流れていた。度重なる水害で幾度も流失の被害に遭っていた。

祭神： 弓削町＝饒速日命 宇麻志麻治命 天照大神 の 3 柱

東弓削＝饒速日命 宇麻志麻治命 弥加布都命 天日熟翔矢命 比古左目彦命 菅原道真の 7 柱

4、由義宮址（西の京）・由義神社（八尾市）

祭神：素戔鳴命 少彦名命

由義宮（ゆげのみや）は河内国若江郡（八尾市）にあったとされる離宮。奈良時代の神護景雲 3 年（769）から宝亀元年（770）ころまで存続。由義神社の境内に「由義宮旧址」の石碑が建ち、付近が離宮の有った場所とされている。

称徳天皇はこの地出身の僧・道鏡を寵愛し、太政大臣禪師さらに法王に任じ、天皇に準じた待遇を与えた。765 年紀伊行幸に際し、行宮を設けて弓削寺に参詣した。769 年和気清麻呂の宇佐八幡宮神託事件直後、離宮を建て由義宮とした。弓削寺も由義寺として整備されたとある。「続日本紀」770 年には帰化人男女 230 余人が歌垣を催したと記されている。

由義宮の名は 769 年に初めて史書に現れる。この年の 10 月、称徳天皇は行幸の際、由義宮を「西の宮」とする詔を発している。

メモ①：道鏡は奈良時代の僧。弓削氏の出身で、看病の功があったとして称徳天皇の信頼を得た。藤原氏の勢力が停滞する宮中で少僧都、大臣禪師と異例の出世を遂げ、765 年に太政大臣禪師に昇格。翌年法王となったが、称徳天皇が没すると失脚し権勢を失い、772 年に死去した。

5、幻の都 幻の七重の塔 道鏡ゆかりの由義宮 遺構発掘

八尾市内「東弓削遺跡」で平成 28 年 9 月、奈良時代後半に作られたとみられる、興福寺や東大寺と同型の瓦が 3 万点近く発見された。由義寺の瓦と推定されている。

平成 29 年 2 月には塔の基壇と見られる巨石も見つかった。基壇周辺から発見された瓦や壁土などに焼けた痕跡が見られ、鎌倉時代より以前に焼失したとみられている。「続日本記」には 770 年に由義寺に塔が建設されたとある。

6、大聖勝軍寺（八尾市）

丁末の変（587 年）のとき、厩戸皇子がこの地の棕木に隠れて難を逃れた後、四天王像を刻み、その加護によって物部守屋に戦勝したので四天王寺を建て、棕木を称えるために当寺を建立したという。門前の「守屋首洗池」は、秦河勝が守屋の首を取って洗ったと伝えられる。付近には迹見赤檮（とみのいちい）が守屋を射たという弓を埋めた弓代塚、守屋の墓などがある。江戸時代の「河内名所図絵」（1801 年）にも紹介されている。

物部守屋の墓（八尾市）

物部守屋は、欽明朝の大連・物部尾輿の子で、敏達・用明朝の大連。母は弓削氏の女・阿佐姫と伝えられ、日本書紀には「物部弓削守屋大連」とみえる。敏達天皇の時代に、仏教受容の蘇我馬子と対立し、廃仏を主張して寺院や仏像を焼き捨てた。用明天皇が崩御し、その後継問題をきっかけに馬子との間で武力衝突となり、馬子は聖徳太子や諸皇子と共に軍を率い、河内国渋川郡の守屋の家を襲撃した。守屋は自ら子弟と奴軍を率い、稲城を築いて（八尾市南木の本付近）戦い、馬子の軍を三度のわたって退けたものの奮闘むなしく、ついに迹見赤檮（とみのいちい）に射落とされ、秦河勝に留めを刺された。墓の周りの玉垣には、全国の有名神社がこぞって寄進している。

7、石上神宮（天理市布留町）

主祭神：布都御魂大神 配祀：布留御魂大神 布都斯魂大神 宇摩志麻治命 白河天皇
神 体：布都御魂剣

「日本書紀」に記された「神宮」は伊勢神宮と石上神宮だけであり、その記述によれば日本最古設立の神宮となる。

古代軍事氏族である物部氏が祭祀し、ヤマト政権の武器庫としての役割も果たしてきたと考えられている。

社伝によれば布都御魂剣は、神武東征で熊野において神武天皇が危機に陥った時に、高倉下を通して天皇のもとに渡った。その後物部氏の祖・宇麻志麻治命により宮中で祀られていたが、崇神天皇 7 年、勅命により物部氏の伊香色雄命が現在地に遷し、「石上大神」として祀ったのが当社の創建としている。

七支刀は古墳時代の作で、金象嵌で記された名文の中に「泰和四年（369年）」に比定する説が有力で、その頃の百濟での作と推定される。重要文化財・国宝。

かつては本殿がなかったが、明治7年禁足地が発掘され、大正2年御本殿が造営された。

平安時代後期、白河天皇が現在の拝殿（国宝）として宮中の神嘉殿を寄進されたと伝えている。中世に入ると、興福寺の荘園拡大・勢力に抵抗してたびたび抗争する。戦国時代に至り、織田尾張勢により社頭は破壊され、神領も没収され衰微していった。明治4年官幣大社に列し、同6年には神宮号が復活された。

《今回の訪問は割愛した2社》

8、矢田坐久志玉比古神社（大和郡山市矢田）

祭神：櫛玉饒速日命 三炊屋媛神 本殿：春日造り 重要文化財指定

櫛玉の尊称は神秘的な力を持つ魂の意である。

創建年代は不詳であるが、6世紀前半までは物部氏の崇敬篤く、畿内随一の名社として栄え、社殿は宏壮美麗を極めたと伝えられる。物部氏の氏寺とされる。

「先代旧事本記」には饒速日命は、天照大神から神宝と天羽羽矢を授けられ、32神と25部の天物部、船長や鍛冶師など多数の従者を従えて天の磐船に乗って降臨した時、天空を飛翔しながら3本の矢を放ち、矢の落ちた所を宮居と定めた。二の矢が当社の境内に落ちたことから、社号を「矢落大明神」と称し、この地を矢田と呼ぶようになったという。この故事に基づき航空祖神として、昭和18年大日本飛行教会から、中島飛行機（現富士重工）製造の陸軍91式戦闘機のプロペラが奉納された。

9、登彌神社（奈良市石木町）

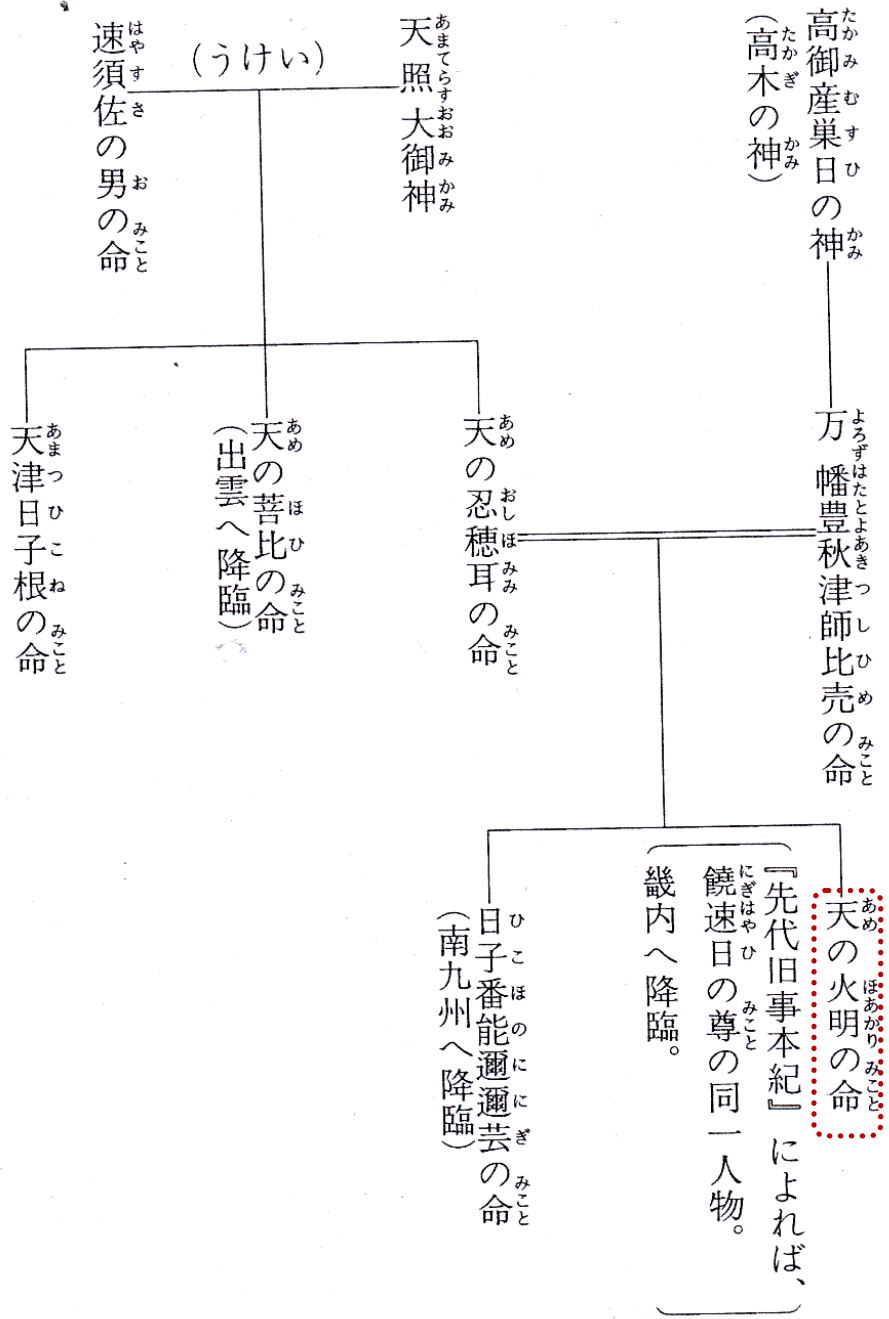
祭神：東本殿 高皇産霊神 誉田別命

西本殿 神皇産霊神 登美饒速日命 天兒屋根命 春日明神など22柱

当社の由緒は神代まで遡る。この地方は長髓彦が天孫・饒速日命を奉じて勢力を拓げていた。日向より東征してきた神武は苦戦するが、奇しくも金色の鵄が飛来して神武の弓の先にとまり、長髓彦の軍勢は目がくらみ戦闘不能となった。地名の登美・鳥見は鵄が訛ったもの。後に饒速日命の子孫である登美の連がこの地・白庭山に命を祀ったのが、当社の創建であるとしている。

- 参考文献 ・ウイキペディア ・ホームページ ・「先代旧事本記」安本美典
・「物部氏の正体」「神社が語る古代氏族」関裕二 ・「物部・蘇我氏と古代王権」黛弘道
・「古代豪族」（物部氏始祖伝承）篠川賢 ・「ニギハヤヒ」戸矢学 など

饒速日命の系図（古事記、先代旧事本紀）



系図4 『古事記』による系図

系図6 『先代旧事本紀』卷五 「天孫本紀」所載、物部氏系譜

あまてるくにてるひこおまのほのかるくしたまにきしはゆりのみこと
 天照国照彦天火明彥玉鏡速日尊

あまてるくにてるひこおまのほのかるくしたまにきしはゆりのみこと
 父 正哉吾勝速日天押穗耳尊
 母 万幡豊秋津師姫栲幡千々姫命

あまのかごやまのみこと
 天香詔山命

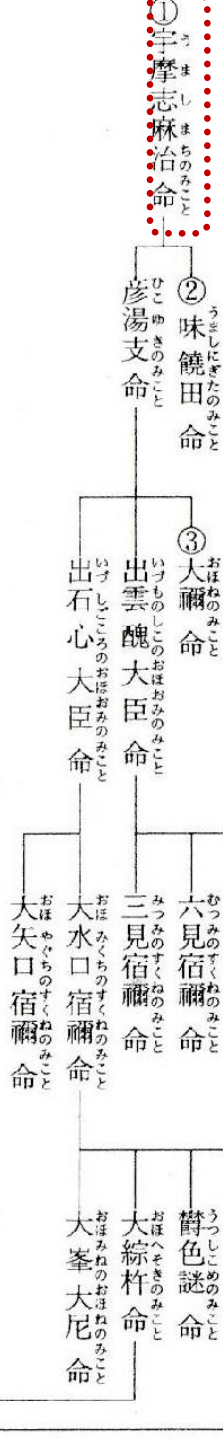
(尾張氏系)
 ① 宇摩志麻治命

② 味饒田命

③ 大禰命

④ 大木食命

⑤ 鬱色雄命



⑥ 武建大尼命

⑦ 建胆心大禰命

⑧ 物部武諸隅連公

⑨ 物部多遲麻連公

⑩ 物部印葉連公

⑪ 物部真棕連公

伊香色謎命
 伊香色雄命

多弁宿禰命
 安毛建美命
 大新河命

物部大小市連公
 物部大小木連公
 物部大母隅連公

物部伊与連公
 物部伊小神連公
 物部大別連公

物部山無媛連公
 物部伊与連公
 物部伊小神連公
 物部大別連公

物部布都久留連公
 物部目大連公
 物部鍛冶師連公

物部十市根命

物部胆昨宿禰
 物部止志奈連公
 物部片堅石連公
 物部印岐美連公
 物部金弓連公

物部五十琴宿禰連公
 物部五十琴姫命
 物部五十琴彦連公

物部伊营弗連公
 物部麦入宿禰連公
 物部石持連公

物部竺志連公
 物部大前宿禰連公
 物部小前宿禰連公
 物部御辞連公
 物部石持連公

建新川命
 大咩布命

物部胆昨宿禰
 物部止志奈連公
 物部片堅石連公
 物部印岐美連公
 物部金弓連公

物部五十琴宿禰連公
 物部五十琴姫命
 物部五十琴彦連公

物部伊营弗連公
 物部麦入宿禰連公
 物部石持連公

物部竺志連公
 物部大前宿禰連公
 物部小前宿禰連公
 物部御辞連公
 物部石持連公

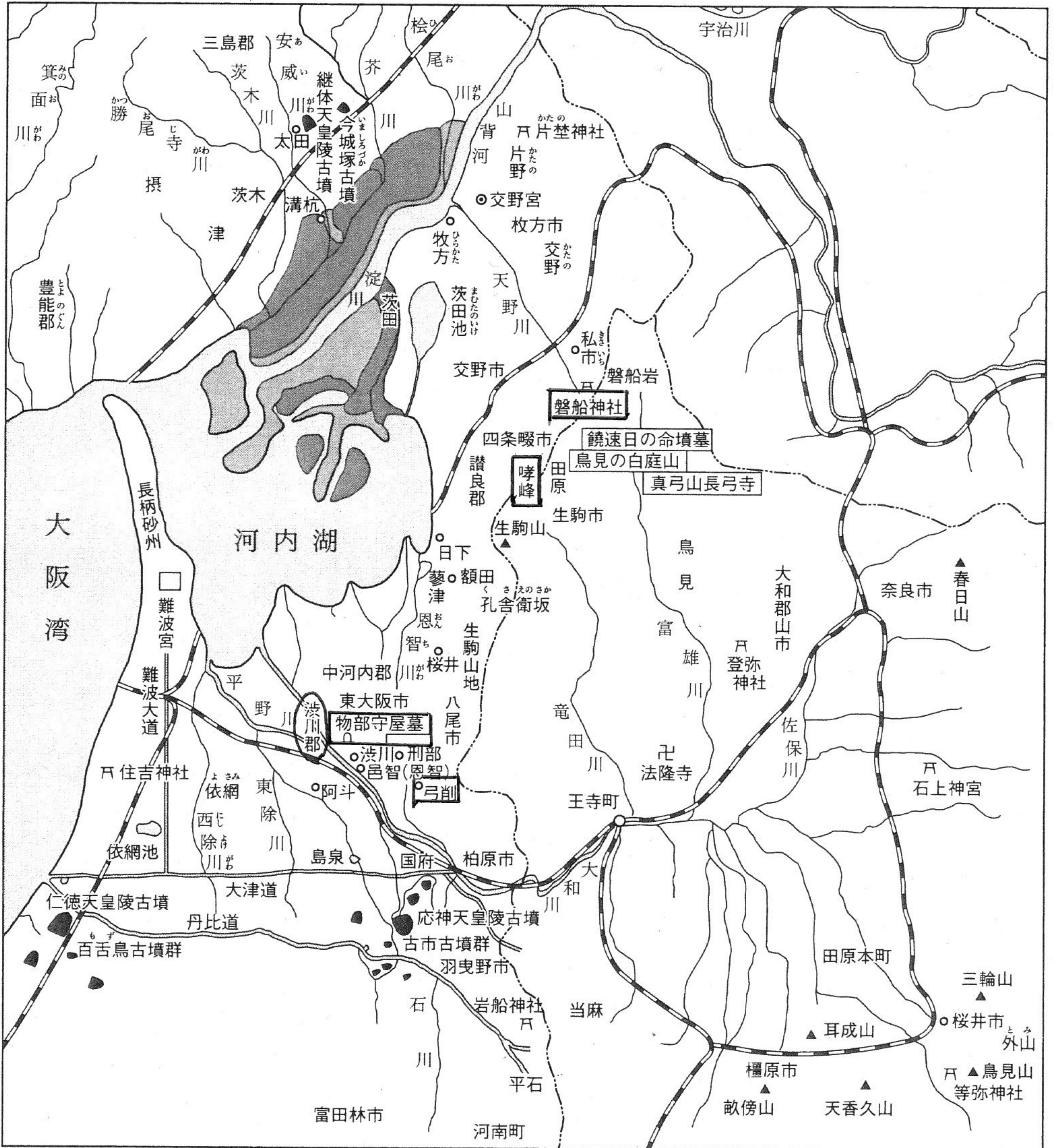
物部胆昨宿禰
 物部止志奈連公
 物部片堅石連公
 物部印岐美連公
 物部金弓連公

物部五十琴宿禰連公
 物部五十琴姫命
 物部五十琴彦連公

物部伊营弗連公
 物部麦入宿禰連公
 物部石持連公

物部竺志連公
 物部大前宿禰連公
 物部小前宿禰連公
 物部御辞連公
 物部石持連公

饒速日命の降臨伝承



道鏡の由義寺？ 遺構発掘

大阪・八尾 東弓削遺跡

奈良時代の女帝・称徳天皇（在位764～770）と、その寵愛を受けて「法王」の座に就いた僧・道鏡（？～772）が建立した由義寺があったとみられていた大阪府八尾市の東弓削遺跡で、巨大な塔とみられる建物の基壇（土台）が見つかった。八尾市文化財調査研究会が9日、発表した。市教委や調査研究会は文献でしか確認されてこなかった由義寺の存在を裏付ける貴重な史跡とし、保存も検討するという。▼37面〓幻の都か

基壇は約20㍍四方で、奈良時代後半の地層から見つかった。古代の寺院建築を研究する奈良文化財研究所の箱崎和久・遺構

奈良期、七重塔の基壇か



発掘された高さ70㍍ほどの基壇の一部
〓大阪府八尾市

研究室長は「七重だったとされる各地の国分寺の塔の基壇や、現存する木造の五重塔の基壇などと比較すると、基壇には高さ60㍍級の七重塔が立っていた可能性がある」と指摘する。

付近からは塔頂部の装飾品「相輪」の破片とみられる銅製品

も見つかった。復元すると直径約90㍍のお椀形になるといふ。由義寺は奈良時代の正史「続日本紀」に登場。770年に由義寺の塔建設に携わった人々に位階を与えたという記述があるが、遺構は見つかっていない。市教委文化財課の消斎課長



道鏡

河内国若江郡（大阪府八尾市）を拠点とする氏族、弓削氏の出身。病氣になった孝謙上皇（後の称徳天皇）の健康回復を祈禱（きごころ）したのをきっかけに上皇の信頼を受け、太政大臣・師、法王へのぼり詰めた。称徳天皇の病没で失脚。左遷先の下野（現在の栃木県）で没した。

は「貴重な史跡で、保存を考えたい。文献には、由義寺の近くに称徳天皇ゆかりの都『由義宮（西京）』もあったとされており、今後さらに調査を続けたい」と話した。

現地説明会は11日午前11時～午後3時。問い合わせは同課（072・924・8555）。

八尾市千塚3丁目の市立歴史民俗資料館では18～26日（21日は休館）、出土品を展示する。

（古庄暢、編集委員・今井邦彦）

歴文研修会

メモ